

日本体育学会
体育哲学専門分科会

会報

Vol.15 (2), August, 2011

記事

巻頭言
体育哲学考
私の研究
書籍紹介
箱根合宿研究会に参加して
運営委員会からのお知らせ
次号予告

巻頭言

今、(財)日本相撲協会の問題が熱い

近藤 良享(中京大学)

小さい頃、相撲放送は退屈で嫌いだっただけでなく、なぜ何度も力士が向かい合って仕切るのか。その意味がわからなかった。しかし、大人になって知ったのは、この仕切り時間がNHKとの蜜月関係に起因し、仕切り時間5分、時計係審判の追加や、カラーテレビ放送開始後、まわしもモノクロからカラー化され、輪島関のゴールドまで登場することになることを知った。最近も、若い力士の暴力死、大麻事件、野球賭博、八百長問題など、矢継ぎ早に不祥事が起こり、本場所や地方巡業などが中止された。これらの問題とからみながら、「日本の大相撲は、武道か、現代スポーツか」などといった議論が盛んである。そのことについて少し考えてみる。

日本の大相撲は、日本人はもとより日本を訪れる世界各国からの外国人にも人気が高い。多くのスポーツ関係の研究者らが、大相撲はパワー、技能、闘争もしくは競争といった近代スポーツの構成要素を含んでいるが故に、研究対象としても高い関心がある。大相撲の競争は、技能はとりわけ重要で、例えば、柔道では階級別で分類され、競技の平等条件が保証されているが、大相撲はそうではない。力士は大きな体重差の中で競技するが、時には、大型力士を小兵力士が打ち負かすこともある。「柔よく剛を制す」を具現化するための仕切り線、立ち会い変化、丸い試合場(土俵)の存在がある。

日本の大相撲は、武道かあるいは現代スポーツかという疑問について、大相撲を武道として特徴づけるのは、奈良、平安時代(642年)以来の相撲史を通じた伝統と儀式がある(新田『相撲の歴史』)。例えば、親方制度、部屋付き(生沼『相撲社会の研究』)、昇進制度、横綱土俵入り、土俵上の女人禁制などがある。

大相撲をスポーツとして特徴づける第一は、正確な取組み判定システムである。すなわち、まず土俵上での勝敗は、行司が判定する。しかし、行司が行う疑義ある判定には、土俵周りの勝負審判員らがクレームをつけ、別室のビデオ室の審判員によるビデオチェック(1969年導入)を参照して、最終的な判定を下すのである。それに対して行司は異議申したて出来ないシステムを作り上げている。NHK放送を利用したビデオによる判定は他のスポーツの導入よりも早くから導入され、正確な判定を期している。

大相撲は、現代スポーツの特質と武道の特質の両方を取り込みながら、大相撲、独自の路線を歩んでいる。日本の大相撲は、伝統と近代の両者を融合させた、日本独自の新しい

スポーツに作り上げられている。

相撲八百長問題に関しても、公益法人という組織であるが故に、相撲部屋の社会集団(親方、力士、行司、呼出し、床山などが部屋に同居)への様々な一般人からの厳しい注文がつけられる。公益法人になることを放棄、断念できれば、これほどまでにいじめられることもない。今回の八百長事件が静まった後、いじめられなくなかったら、公益法人の肩書きを外すために、自立・自律できるような組織に生まれ変わるために準備しておく必要がある。逆説的だが、公益法人化をしなくても運営できるような敏腕な人が日本相撲協会の中にいたのであれば、これほど多くの不祥事がつづけて起こることはない。力士出身者による均質の協会運営集団は、やはり異種、異質な (heterogeneous) 人々を入れて多様化 (diversity) させ、組織変革していくことが求められるだろう。

(近藤 良享 yo-kondo@sass.chukyo-u.ac.jp)

体育哲学考

トータルとしての健康

小川 宏 (福島大学)

その昔、あるTV番組で所ジョージさんが「コーラに入っている成分は体に良くないから絶対飲まない、なんて神経質に気にする人より、一汗かいた後、コーラをぐいっと飲んで、コーラ最高！なんて言ってる人の方がよっぽど健康だよ」という発言を聞いて、なるほどと妙に納得した記憶があります。それは今でも私の中で、「トータルとしての健康を考える」「トータルとしての幸福を考える」という一つの教訓にもなっています。

去る3月11日に発生した東日本大震災 福島県では原発災害による放射線被ばくの問題が発生しました。2度の水素爆発により大気中に放出された放射性物質は風に乗って、福島県内外に広くばらまかれ、地表や農作物の一部から基準を上回る放射性物質が検出される騒ぎになっています。私が住む福島市でも、学校の校庭表土を削り取る、当面の間は屋外での体育授業や屋外活動を制限する、などの措置がとられています。また市民の間でも、子どもたちを公園で遊ばせない、外出するときはマスクを着用する、福島、茨城県産の野菜は買わない、水道水は飲料に使わずペットボトルのミネラルウォーターを買いだめする、などの、過剰とも風評とも言えるほどの反応が、原発事故から四ヶ月以上経った今も見られます。

確かに、放射能という、普段はほとんど意識することのなかった物質が突然身近に押し寄せてきたことで、健康への影響について不安に思うのは当然のことでしょう。しかし、幸か不幸か(おそらく後者ですね)、この放射線被害に巻き込まれた私たちは、放射線が人体にどのような影響を与えるのかについて、様々な機会を通して学ぶことになりました。その結果、実は私たちは日常的に放射線を浴びており、放射線は決して特殊なものではない、ということや、現在受けているようないわゆる低線量の被ばくでは、確定的な健康被害があるとは言えない、ということを知ることができました。

そのように冷静に現在の放射線被ばくの影響をとらえた上で、トータルとしての健康、トータルとしての幸福を考えたとき、私たちはどんな行動を選択すべきでしょうか。現在の低線量放射線被ばくを気にしすぎるあまり、子どもを屋外に出さない、校庭や公園で遊ばせない、屋外のスポーツ大会を取り止める、プール授業や運動会を中止する、などの方策をとることが、トータルとしての健康、トータルとしての幸福につながるのかどうか。被ばく量が多少高いからといって、長年住み慣れた村や地区から引き離し、全く違う場所、

異なる環境で、ストレスを溜め込みながら避難生活をさせることが、本当にトータルとしての健康、トータルとしての幸福につながるのかを考える必要があると思います。

現在取りざたされている放射線については敏感になっている人が、その一方で、家族の喫煙による副流煙や、コンビニ弁当に含まれている合成着色料がもたらす健康への影響には無頓着だったり、運動不足で高カロリーの食生活を続けるメタボ体型だったとしたら、やはり健康に対する意識としては、全体のバランスを欠いているような気がします。いつもお金が必要になるか分からないからと、今欲しい物や、やりたいことを我慢して、老後までひたすら節約してお金を貯め、結局何にも使わないで人生を終える人もいます。いただきもののお菓子や食品を大事に冷蔵庫にいつまでもしまっておいた結果、賞味期限を過ぎてダメにしてしまうことがあります。好物が食卓に出たとき、最後に食べようとしておいて、ほかのものを食べているうちに満腹になって美味しく食べられなくなったりします。大切なのは、今どうすることがトータルとして幸福になるかを考えることだと思います。

近くの高校のグラウンドでは、サッカー部が汗まみれ土まみれになってボールを懸命に追いかけていました。市民の中には「放射線被ばくの危険があるのに何やってるんだ」と心配する人もいるかも知れません。しかし彼らにとっては、もしかするとほんの少しあるかも知れない放射線被ばくのリスクは承知の上で、しかしそれよりも今、大好きなサッカーを思い切りプレーする喜びの方がはるかに上回っているのでしょう。そしてその選択を高校生自らがすることは、彼らのトータルとしての健康、トータルとしての幸福を考えると、確かに「あり」だと思うのです。

(小川 宏 ogawa@educ.fukushima-u.ac.jp)

私の研究

生涯スポーツ概念の研究

千葉 洋平(国土館大学)

私の研究テーマ 新しい生涯スポーツ概念の提示

私は、現在、生涯スポーツの概念をテーマとして、研究を行っています。それは、「全ての人にスポーツは必要なものである」という時のスポーツとはどのようなものかを考えることであり、そのことで新たな生涯スポーツの在り方を提示していきたいと考えています。

大学院時代の研究 身体練習概念の提示

大学院時代は、どのような活動が生涯スポーツにとって重要であるのかについて検討を行いました。

現在の生涯スポーツ振興は、専用施設の建設やクラブの育成、あるいは大会の開催等がその中心的手法とされています。しかし、そのようなサービスを利用してスポーツを行う市民はわずかであり、これまでの手法には限界が生じてきていると言えます。他方、市民の間で支持を受けているスポーツとは、道路や公園、自宅等で行われる体操、散歩、ランニング等となっています。このような日常生活圏で行われる活動は、これまでさほど注目をされてきませんでした。しかし、人々の健康や美容、社交、自己開発など多くの要求が満たされる意義のある活動として市民の生活に位置付けています。これらの活動には、目的のために、繰り返し習うという性格があることから、私はこれを「身体練習」と定義し、生涯スポーツの中で重要な活動だと考えました。

身体練習とは何か

身体練習は、これまで一般的に捉えられてきたスポーツの概念よりももっと広い概念で

あると考えています。

例えば、掃除をすることは身体練習に含まれます。通常であれば、立って掃除機をかける場面でも、四つん這いの姿勢で雑巾をかければ、足腰を鍛えることができます。また、掃除をすることは、計画や見通し、注意集中、判断、あるいは創造といった精神活動の向上にも寄与します。このように身体練習の見方を取り入れることで、自分の要求にあった運動をすることがより身近なものとなります。

さらに、身体練習が意味する 練習 にも、一般的に思い起こされる練習とは違った意味が含まれています。その分かりやすい例は、遊びです。

ほとんどの練習にはそのための目的が存在していたり、あるいは指導者の配置や大人の関与があったりします。しかし、遊びは必ずしもそうではありません。特に子どもの遊びでは、自らの発達を意識して遊ぶことは少ないでしょう。また、大人の監視がない方が、子どもは、生き生きと遊ぶことができます。逆に遊びが大人によってコントロールされてしまうと、創造性やリーダーシップなどの集団に必要なスキルが育たなくなってしまう。遊びは、これまで哲学の重要なテーマとして扱われてきたように、遊びの効用をうまく引き出すためには、かなりの工夫が必要とされます。遊びに代表されるように、身体練習には独特の特徴があり、身体練習を通じた運動の効用の引き出し方を哲学的に考察する必要があると考えています。そして、地域社会や学校現場の中で、身体練習をどのように展開していくのかについて今後も研究を進めていきたいと思っています。

これから私の研究に関して何か意見を頂ければ大変嬉しく思います。是非学会などでお会いできるときは、ご指摘を頂ければ幸いです。

(千葉 洋平 yohei@festa.ocn.ne.jp)

書籍紹介

野矢茂樹 (2006) 『入門！論理学』中公新書
佐々木 究(山形大学)

本書は、論理学の入門書である。ただし、これまでの類書とはちょっと違う。縦書きで、しかも記号がほとんど使われていないのである。論理学の勉強をしようと思って本を開いたのはいいけれど、記号の海でおぼれてあえなく挫折、という経験は、皆さん、一度はお持ちのことと思う(私がそうである)。本書は、今まさにおぼれている人にはワラほどの足しにもならないが、これから(あらためて)泳ぎはじめようという人にはそれなりの有用性があると思う。

著者にはすでに、論理(学)に関する著作がいくつかある。『論理トレーニング』(1997, 産業図書), 『論理学』(1994, 東京大学出版会)などである。これらの作品には共通してあるねらいがある。それは、単に論理学(の基礎)をレクチャーするというだけではなく、そのことを通して、私たち読者の論理的な力そのものを高めようというものである。『入門！論理学』も同様であり、「論理学の核心部分」を描き出すという固有の主題とともに、読者の「論理力を鍛え」ることがねらいとして明示されている。著者によれば、「論理」は私たちの普段のことばづかひの「重要な技術のひとつ」であり、「論理学」の仕事は、そうした「論理」の仕組みを解明することにある。本書で試みられるのは、このような「論理学」の営みを実践することであり、私たちは、その行論を追跡することによって自らの論理力を向上させていくことができるというのである。もちろん一般論としては、論理学の

本であるからといって、地の解説文まですべてが論理的であるということにはならない。しかし本書は、論理力を鍛えると明言するだけに、非常に丁寧に言葉が紡がれている。原著からの引用になるが、論理的であるための「ポイントは『対話の精神』にある」のであり、この点がしっかり踏まえられている。論理的な文章によってこそ論理的な力は鍛えられるのである。

本書で取り上げられる論理学に関する主なトピックは、「否定」、「かつ」と「または」、「ならば」、「すべて」と「存在する」などであり、これらによって構成される「述語論理の公理系」が提示されて、本書は終わる。導入則や除去則といった一般的には耳慣れぬ言葉がしばしば用いられるものの、丁寧な説明に導かれながら、最後までさらさらと(?)読み通すことができる。そしてそのときには、私たち読者の論理的な力は(それなりに)向上しているはずであり、論理学の基本的な考え方なども(それなりに)見通せているはずである。

本書を貫いているのは、難解な学問論ではなく、論理学という「学問の根本的なところ、その本質」を抽出すること、そしてそれをわれわれ素人にも分かるような形で提示しようという対話的な態度である。論理学を学ぶということは、基礎的な素養として大切なことである。しかし、もしかしたら、こうした対話的な営みに触れることこそが、私たちの目指す「哲学」的な実践においてより有用であるのかもしれない。

(佐々木 究 sasaki@e.yamagata-u.ac.jp)

箱根合宿研究会に参加して

高橋 晋吾(東京学芸大学大学院)

今回、初めて体育哲学専門分科会夏期合宿研究会に参加させて頂きました。いつもと違う環境で多くのことを学ばせて頂き、大変有意義な3日間であったと思います。

私は昨年までサッカーをしていたので、合宿というものは数多く経験してきましたが、今回のような学問の合宿は初体験でした。全く別物という心持ちで、参加する前から大変緊張していましたが、日数を重ねていくうちにサッカーの合宿と類似する点を感じられました。サッカーの合宿では、数日間詰め込みでサッカーばかりを行うので、個人の技術が向上します。また、チームメイトと生活を共にすることで、団結が深まり、チーム力が向上します。

これを体育哲学の合宿に置き換えますと、技術は知識や知性、チーム力は体育哲学の研究発展、と考えられます。内容は異なりますが、合宿の意義や目指すものは類似していると感じられました。その点から、この合宿研究会へ臨む態度というものが少し理解できたと思います。

また、この合宿研究会では、懇親会等もあり、学問だけでなく様々なお話をさせて頂く機会がありました。大変親睦が深まる3日間であり、それがこの分野のさらなる発展へと繋っているのではないかと思います。

研究発表では、多くの先生方の研究を聴き、その視点と論理的考察から多くのことを学ばせて頂きました。また、質問や意見をされた先生方の発言も、非常に論理的であり、別の視点から物事を捉える哲学的な見方に感心させられるばかりでした。

自分の研究に対してそのような哲学的な態度で臨みたいと思う一方、自分にできるのかという不安を感じずにはいませんでした。研究小報告という形で、私自身の研究の方

向性について発表させて頂きましたが、まだまだ力不足であり、自身の研究に対しさらに深く考察していかなければならないことを痛感しております。佐藤臣彦先生のお話にもありましたが、未知となる多くの著書にあたり、知識を蓄え、論理的思考性というものを高めていきたいと思っております。

来年度は、発表者としてこの研究会に参加することを目指しながら、日々勉学に励んでいきたいです。

(高橋 晋吾 m112211f@st.u-gakugei.ac.jp)

運営委員会からのお知らせ

新保 淳(静岡大学)

今年度の日本体育学会(於：鹿屋体大)に関する情報

「専門分科会企画」と「一般発表プログラム」の日程についてお知らせいたします。

9月25日(日)

一般研究発表

座長：石垣健二(新潟大学)

10:30~11:00 福本 まあや(富山大学)野口整体とボディ-マインド・センタリングの比較研究

11:00~11:30 森田 啓(千葉工業大学)教養教育としての「身体」

11:40~12:40 運営委員会

12:50~13:50 キーノートレクチャー

「体育と人間形成」研究の現在~体育は人間を創るか
友添秀則(早稲田大学) 司会：久保正秋(東海大学)

14:00~16:00 シンポジウムA

体育における評価を問う(1) 評価の構造・目的・意義を問う
司会：深澤浩洋(筑波大学)・森田啓(千葉工業大学)

(1) 教育評価論の射程：田中耕治(京都大学)

(2) 体育における目的・目標論の構造論的把握：佐藤臣彦(筑波大学)

(3) 教科体育における評価の特性：木原成一郎(広島大学)

9月26日(月)

一般研究発表

座長：河野清司(至学館大学)

9:30~10:00 坂本 拓弥(東京学芸大学大学院)体育教師論の批判的検討

10:00~10:30 新保 淳(静岡大学)体育科における授業研究支援のための研究方法に関する研究

10:30~11:00 別所 秀夫(広島大学大学院)学校教育における体力概念の研究

11:10~12:00 総会

座長：小林日出至郎(新潟大学)

13:00~13:30 手 向東(広島大学大学院)<身体教育>の視点から見た中国の近代教育思想の枠組みについて

13:30~14:00 渡邊 伸(信州大学)運動の「相互隠蔽原理」

9月27日(火)

一般研究発表

座長：高根信吾(富士常葉大学)

- 9:30~10:00 鈴木 明子(東海大学大学院)余暇の本質に関する一考察
10:00~10:30 長島 和幸(早稲田大学)わが国のレスリング導入期における興行化志向とオリンピック志向の対立
10:30~11:00 大峰 光博(早稲田大学大学院)スポーツの試合における意図的ルール違反の是非に関する研究

座長：阿部悟郎(仙台大学)

- 11:00~11:30 大橋 奈希左(上越教育大学)ダンス教育における作品存在についての考察
11:30~12:00 三輪 亜希子(名古屋女子大学短期大学部)海外活動キャリアをもつ日本人ダンサーが捉える20世紀の舞踊と今後

座長：大津克哉(東海大学)

- 13:00~13:30 岡部 祐介(早稲田大学)東京オリンピック以降のスポーツにおける「根性」の変容
13:30~14:00 小林 日出至郎(新潟大学)『イリアス』における競争に関する研究
14:00~14:30 村山 輝志(鹿屋体育大学)武道と礼

分科会メーリングリストへのご登録のお願い

メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、分科会活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。以下のような手順で登録できます。

- 1) グループへ参加するには、事務局：新保(ehashin@ipc.shizuoka.ac.jp)までご一報ください。事務局にて登録の手続きをさせていただきます。
- 2) 登録完了後、taiikutetsugaku@yahoogroups.jp を用いてグループメンバーにメッセージを配信することができます。

なお、異動等の関係でメールアドレスに変更があった場合は、速やかに事務局までお知らせ下さい。宜しくお願いいたします。

(新保 淳 ehashin@ipc.shizuoka.ac.jp)

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は釜崎太(kamasaki@meiji.ac.jp)までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門分科会報第15巻第2号

発行者 日本体育学会体育哲学専門分科会
大橋道雄(会長)
編集者 阿部悟郎(広報委員長)
発行日 平成23年8月10日
連絡先 989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南2-2-18
仙台大学体育学部
0224-55-1147(直通)
アドレス：gr-abe@scn.ac.jp

【編集後記】

夏の恒例行事、「夏期合宿研究会」が成功裏に終了。此度は大学院生の研究発表が多く、若手の台頭をとて感じる会でした。体育哲学の未来はみなさんの双肩にかかっています・・・と会長の弁。さて、ひと山超えたら次の山。次は9月の日本体育学会です。スター登場のキーノートレクチャーにキラ星や巨星がそらい踏みするシンポジウム、そして体育哲学専門分科会の生命線としての一般研究発表と、こちらも興味深いプログラムが盛りだくさん。鹿屋の地でお会いしましょう。(A拜)